

## 東京大学所蔵『宗祇假名遣』について

崎村, 弘文  
鹿児島大学教養部講師

<https://doi.org/10.15017/10500>

---

出版情報 : 文献探究. 11, pp.42-49, 1983-03-15. 文献探究の会  
バージョン :  
権利関係 :

東京大学蔵 『宗祇假名遣』について

崎村弘文

東京大学文学部国語研究室所蔵の仮名遣い書『宗祇假名遣』について紹介するとともに、その、国語表記史資料としての価値を明らかにしたいと思う。

同書は、『国書総目録』にへ一冊 ㊦語学 ㊧東大・旧下郷(寛保三写)✓として登録されているもので、戦災で焼失したという下郷文庫の焼け残りである。筆者は、同研究室ならびに東京大学附属図書館の方々の御好意により同書の紙焼き写真を送って頂き、その内容を知ることができた。関係の各位に篤く御礼申し上げる次第である。

写真によれば、同書の書誌、次の通り。袋綴じ一冊(四針眼訂)。タテニ二・九cm×ヨコ一四・九cm。無地表紙の左肩に題簽(タテ一三・七cm×ヨコ三・二cm)、雲形に金銀砂子を散らし秋草を描いた地に「宗祇假名遣」と記す(その文字は本文と別の筆に成るものようであるが、写真のみからは明確にしがたい)。表紙見返しは、やはり雲形に金銀砂子(上部中央に「東京帝國大學圖書印」一顆、その下と右に函架番号の印・ラベル、左下隅には「国語」の小印一顆)、裏表紙見返しも同様の装飾である。遊紙一丁の後に、墨付き三〇丁が有る。

本文は三部に分かれ、一丁表〜二丁表が「宗祇かなつかひちか

みちの事」、一三丁表〜二七丁表が「假名つかひ近道の抜書」、二八丁表〜二九丁裏が「宗祇假名つかひ口傳の奥秘」となっている(第二者の末尾・二七丁表左端には「宗祇かなつかひちかみち終」と有つて、あたかも「——ちかみちの事」に志じた尾題の如くであり、前二者を分かつことに若干の問題が無くもない。しかし、第一者と第二者は、下述の如く、互いに同一書の異本に当る内容を持つものであり、本来一体を成していたものとは思われない。同書の成立を考ふる上からは、両者を分けて考ふるのが適当と思われる)。全で一筆に成るものとおぼしく、近世中期以降の書写と見られるが、それを具体的に示す記載は無く、ただ巻末に「此一巻ハ宗祇假名つかひちかみちと云／極秘の口傳書なり池田玄察處士の／所傳也」という製書きが有るのみである(「池田玄察」については未詳)。この点、『国書総目録』にへ寛保三写✓と有るのは不審である。或るいは、別紙等にその旨記されているのかもしれないが、これも写真のみからは判断できない。後日を期したいと思う。

同書の内容を他の仮名遣い書のそれと比較してみると、次のようなことが明らかになる。

(1)「宗祇かなつかひちかみちの事」、「假名つかひ近道の抜書」の二者はほぼ同じ内容を持つものであり、ともに、『丹抄かなづ

かいいおよび伝牡丹花肖柏著『假名遣近道之事』とごく近い関係に有る。

(2) ただし、「―ちかみちの事」は、首題に宗祇の名を冠するのみならず、巻末に宗祇自らの識語なるものを置いて宗祇の作たることを強調しており、他のものとは成立の伝を異にする。

(3) 「宗祇假名つかひ口傳の奥秘」は、「い・る・を・お・ふひへ・え・ゑ・ほ・は・わ(ゑ)・わ(わ)・う」の仮名遣いを、要点のみ、ごく簡略にまとめたもので、他に類例を見ないが、掲げられた項目のほとんどは「―ちかみちの事」「―抜書」に含まれるものである。

つまり、この『宗祇假名遣』なる一書は、カナヅカイチカミチもしくはそれに類する書名をもって流布した近世定家流仮名遣い書の二本と、その要義集らしきものを集成し、それに宗祇の名を冠したものと、ということになる。宗祇作の真偽のほどは不明であるが、カナヅカイチカミチ類の諸書には、

① 肖柏・三条西実隆など、連歌や古今伝受を通じて宗祇とつながりの深い人々を作者に擬するものが多く、

② 内容的にも、特に『古今和歌集』物名歌を引いて芭蕉・龍胆・紫苑・牽牛子…等の表記を説くなど、古今伝受との関わりを思わせるところがあり、

宗祇との関係を全く考え得ないものでもないものである。とりあえず注目しておいてよい事と思う。

また、要義集については、全体の簡略さに加え、一部にへを月を花を／ををそしをそゆるVの如き韻律句めいたものが認められることから、『假名遣近道略歌』等の暗誦歌注と何らかの関連を持つのではと推測されるが、はっきりしたことは分からない。多くの資料によって検討すべき課題である。

中世以降における国語表記の実態は次第に解明されつつあるものの、それを支えていた原理・資料については、なお不明の点が少ない。これを明らかにするには、先学の紹介された資料に整理を加えるとともに、新資料の発掘に精力的に取り組むことが必要であろう。小稿はそのような意味合いでまとめたものであるが、以後、同様の考察を積み重ねて行きたいと思っている。識者の御教示を請う。

なお、次頁以下に綱字を示す。御参照頂ければ幸いである。

### 【注】

1 『丹抄』―『近道之事』については、木枝増一『假名遣研究史』(昭8)・島田勇雄『連歌師のかなづかい書』(『甲南大文学会論集』32・昭40)・追野虔徳『定家以後の仮名遣』(『今井源衛教授退官記念文学論叢』所収・昭7)等参照。なお、他にも異題同内容のものが有る。

2 注1に引く木枝氏の著書参照。同書には、他にも二・三の暗誦歌集が紹介されている。

宗祇かなつかひちかみちの事

一 中のえを書事申中をゆとよむハ中のえを書也

越こえ、消きえ、見ミえ、崩もえ、絶たえ、寒さちえ、覺おほえ、聞きえ、燃もえ、肥こち、愈いゆる

此類は何も中のえを可書

一 ぼををとよむかなの事

その字聲はねてよみたるハ皆ぼををとよむなるへし

しほ、塩いほり庵かほ、類、さほ、竿かほる煮にほふ句、おほふ、掩うるほ、潤あさほ、權こほり郡ほのほ、焔こほり水

如此聲をはねてよめる字ハ皆ほなるへし

一 はしのを、書事、小の字の類は何もはしのを也

をふね小舟をの、小野を山田小山田、をかハ小河をしま小嶋をくら山小倉山、をしか小鹿をさ、原小篠原を三の袖小忌の袖、をくるま小車つげのをくし小柳賤のをたまき小手巻、玉のをやなき小柳

此類皆はしのをなるへし

21

22

23

一 おくのおを書事大の字ハいつれもおくの

おほ空大、おほかた大、おほ院大、おほ海大、おほ江山大江山、おほほら山、原山、おほ井川、大井川、おほいまうちきミ大臣

此類おくのおなり

一 はしのを書事、ふひへ此ミつにかよふハいつれもはしのをなるへし

おもふへ、ねかふへ、願むくふへ、酬いふへ、つかふへ、まとふへ、惑たくふへ、たよふへ、はふへ、蕪の類、たかふへ、違かたらふへ、ちかふへ、誓いはふへ、祝、たとふへ、となふへ、そふへ、さそふへ、あふへ、かよふへ、かなしふへ、とまなふへ、まよふへ、うたふへ、とふへ、やすらふへ、木かふへ、うりかふへ、くるしふへ、なすらふへ、うやまふへ、とまふへ、うかふへ、むかふへ、きしらふへ、えふへ、酔、あらそふへ、いさなふへ、たくはふへ、つかふへ、したかふへ、うつろふへ、うらなふへ、まふへ、つくろふへ、やしなふへ

27

28

29

ならふへ、おこなふへ、さらふへ、かこふへ、くらふへ、物をしつらふへ、ねらふへ、くふへ、のこふへ

此外にふひへの中ひの字を除く字有

わきもふへ、こたふへ、くはふへ、うれふへ、あたふへ、そのふへ、さかふへ、とこのふへ、たくはふへ、なからふへ、をとろふへ、よこたふへ、うへ草木、うふる、をしへ、をしふる、ふまへ、ふるまふへ、ましへ、ましふる

此外にしろしおとしたるもあるへし

他准之如此はひふへほにかよふ

五音の中へにはしのを書事

此類なり忘ても此類によめぬかな

に中のえや又おくのゑなとかくましき也

一 中の井を書事下のひがきあまたにかよハす一しなによむハ中のあるるへし

くれな井、くれなふとくれなへとも、雲井、たましのくら井、つ井に、まと井、よ井、い井、うるかふり、し井、柴、な井、く井、な、し井て、きるる、驚、こ井とり

57

47

44

人を待りてに井枕に井としいも井の場

此等の類なるへし

一 うの字を下に書事下のひ、まあまたに  
よめさるハウの字也

、ソウ僧、ほうし法師、せうかう焼香、  
、ねうはう女房、どうだう同道、せうくウ々  
、こりりう興隆、くうする、、かうし料紙、  
、まうけのわう儲料

此類に聲によむ字の下をうとよむ時は

大略ハウの字也、くんによむ時は下をうと

よむ字ハふの字をうの聲によむなるへし

一 じの字をうの聲によむ事口をむすひてよむ

字ハむの字をうのこゑによむなるへし

、むまれ木、むめ梅、むまれ生

、むは玉の夜、むま馬、むへ山風

、むへなるはなし

一 物のをといふ緒の字ハいつれもはしのを

なるへし

、玉のを、琴のを、琵琶のを

、鐘のを、甲のを、念珠のを

、鷹のへを、沓のを

此類何も物のをハ皆はしのをなり

尾の字ハいつれもおくのおなり

、鷹のおのは、山鳥のしたりお 虫の類

皆おくのお也

一 をし、をさへてなといふハミなはしのをなるへし  
一 をしなへて、をし明かた、舟を、す  
一 をしはかる、をしよする

此類忘てもおくのおにてあるまし

一 物の音ハ何もはしのをなり

、をとつれ、鐘のをと、かせの音  
、をとハ川、をとなし川、まりの沓をと  
、物をうつをとつ、ミのをと

此等類忘てもおくのおにてハあるへからす

一 はせをはせうとハか、すはせをと

かなによつてなり 古今の右の哥に

はせをはとよめり

作者きのめのと

いさゝめに時まつまにそひはへぬる心

はせをハ人に見えつ、

さゝまつひははせを 此四つを

うち入てよめる哥也

一 りうたんの花とかけり りんたうとハか、す

この故に及則か哥に わかやとの花ふミ

ちらすとりうたん野ハなればやこ、にし

もくる

一 けにごしとかけりけんこしとハか、す此故に

うちつけにこしとや花の色をミン

をくしら露のそむるはかりを

一 をみなへしとハはしのをなり女郎花と

かけりをんたとハはしのをなるへし

をミなへしたちいりたる哥に

しらつゆを玉にぬくとやさ、かにの

花にも葉にもいとをミなへし

一 おとこはおくのおなり、をこの時は

はしのをなるへし

一 此近道之口傳の外にかれこれかけるかな

おほしかなにかきて字わろきもあれ

ははしのいやおくのひや中の井やなと

おもひの外にかけるもあり中のえハ中

とゆくところをハえとかける故にし

るせるより外には中のえをかける

字はあるへからすとなりはしのへに

ふひへとかよハぬ外にはしのへをかける處

おほし

一 いろたへたへかねてなと妙の字と堪の

字とはふひへにハかよハされともはし

のへをかけり、かへる、なとかけるふひへ

とハ中かさる也されともかへるといふ字かな

に書時は中のえおくのゑ似あはぬあい  
たはしのへをかへるとかけり

此類他にしゆんすへし

をのれをのつからをのくをのかさま

これハわすれてもおくのおにてハ有へからす

おほしめしおほしましなとハおくのおなる

へしおほしましなとほしのを書入

ありあやまりにやおハしましとハ

御座とかけり何も御の字ハおくの

おなるへし

右之近道の事かたつ井中の

少童新發意やうの人あまりに

かなちかひかきしとかへハそのことき

の人のためにしるての御事に作

程に仰の處いなとも申得すミテ

かくのことくに候他見以外の事

たるへく候也

宗祇作之

假名つかひ近道の抜書

一中の江を書事(まこと)を中とよむハ中の江を  
かくなり

107

越こえ

消きえ

見みえ

聞きこえ

絶たえ

覺おぼえ

崩もよえ

燃もよえ

肥こえ

諭いづ

此類何も中の江をかくへし

一ほををとよむかなの事其の声は  
ねてよみたるハミなほををとよむ成

へし

いほり庵いほりかほ顔かほにほふほ蕉せう

さほさ辛しんおほふおほ庵いほしほし塩しほ

いはほい巖いうるほうふふ潤じゆんあさかほあ種しゆ

ほのほほ焰えんこほりこ郡ぐんこほりこ氷ひ

此類皆ほなるへし

一はしのをかく事小の字類何もはし(より)の(し)

のをなり

をふねふ小船せう

を野の小野せう

をくらく山さん小倉山せう

をささ小篠せう

をくるくまま小車せう

をたまたまま小手巻せう

をしかし男鹿是も此をなるへし

此等皆はしのをなるへし

131

一おくのおかく事大の字ハ何もおくのお也

おほ空くう大空たいおほかたか大方ほう

おほ淀てん大淀たいおほ江山さん大江山たい

おほ原げん山さん大原山たいおほ海かい大海たい

おほ井川けい大井川たいおほいいままうちちきき大臣だい

此類おくのおなり

一はしのへをかく事ふひハ三にかよふをハ

何もはしのへなるへし

思しふふねねかかふふ

物ぶつをつつかかふふいいふふままととふふ

藪田殿にて或人の發句に

雪にけさ春たくひなし峯の松

あらあふらふらふらはらららふらちちかかふふ

たたかかふふたたよよふふかかたたららふふ

ににななふふいいははふふたたととふふ

ととななふふそそふふささそそふふ

ああふふかかななふふととふふ

ととももななふふままよよふふううたたかかふふ

水みづかかふふややすすららふふううかかふふ

ななすすららふふううややままふふすすくくふふ

ひひろろふふああららふふししたたかかふふ

ううかかふふむむかかふふききららふふ

よよふふああちちかかふふははふふ

147

147

151

157

161

いさなふへ たくわふへ つこふへ  
うつろふへ かけろふへ うらなふへ  
まふへ をこなふへ やしなふへ  
ならふへ いとふへ きらふへ  
かこふへ づくろふへ くふへ  
物をしつろふへねかふへ もらふへ  
かんかふへ

此外にふひへの中のひの字を  
のそきたるもあり

わきまふへ こたふへ くわふへ  
うれふへ あたふへ そなふへ  
とこのふへ さかふへ たかふへ  
なからふへ おとろふへ うかふへ  
をしへまかふるへをしふるへ ふまへ  
ふるまへ ましへ

此外にしろしおとしたるもあるへし  
他准之如此はひふへほにかよふ五音の  
ゆへにはしのへ書事此類なり

忘ても此類によめむかなに中のえ  
一中のゐをかく事下のひきあまたに  
かよわすたひとしなによむハおくのゐ  
成へし  
くれなる、くれなふともくれなへとも

1177

1178

1187

よまさるによつて中の井をかく成へし  
いる、しぬ柴、うらなふり  
つるに、まどる圍居よる膏  
くぬな鳥、しぬて、みるる鷹  
こゝるとる鷹、待るて、にるまくら新杖  
にるとし新年

一おくのゑを下にかく事  
こゑ、すゑ、にゑ

うゑもん、さゑもん、うひやうゑ  
さひやうゑさへもんにてハあるへからすおくの  
ゑをかく事あまた有ましき成へし  
一はしのいを下に書事こゑあまたによま  
さるゆへにはしのいをかく成へし  
おいのねさめ  
そ木の生てといふハおひてとひの字  
をかくなり

草木のおひておふるなといふゆへふひ  
へのかよひによりて生の字の時ハおるて  
なり  
ひたい類、らはい礼拝たいない胎内  
れい礼 此類はしのいを下に書也  
大略こゑによむ字の下をよめるハはし  
のいなるへしくんによむ字の時ハ下を

1191

1197

1191

いとよむをひの字をかくあまたあり  
うくひすとハくんのよみ也  
声ハあふの声也うくひすとハ、んハ  
かなの字かきたる所也わろきによりて  
うくひすとハきつ、けてよろしきと  
なり  
古今の哥に  
心から花の雲にそほちつ、  
うくひすとハくんの啼らん

此類多くあるへし  
一うの字を下に書事下のひきあまた  
によまさるハうの字なり

そう僧、ほうし法師、せうかう焼香  
ねうはう女房、とうたう同道、せうく少々  
たうたう堂塔、こうりう興隆、くうするきまう  
けのれう儲料、れうし料紙

此類も声によむ字の下をうとよむハ  
大略うの字なるへし、くんによむ時ハ  
下をうとよむ字ハふの字をうの声  
によむもあるへし  
一むの字をうとよむハ口をむすひて  
よむ字ハむの字をうの声に讀なるへし  
むもれ木、むめ、むまれきて

207

201

1197

右近のむまは、む(山風)、むは玉の夜、せうとむは

此類成へし

一物の緒といふをの字ハ何れもはしのを成へし

玉のを、玉の緒、むわのを、鐘のを

甲のを、念珠のを、けさのを

くし箱のを、鷹のへを、杓のを

此類いつれも物のをハはしのをせ

一尾の字ハ何もおくのお成へし

おのへ、鷹のおのは

山とりのおのしたりお、馬のおかミ

鳥獸虫生類の尾ハ皆おくのお成へし

一をしをさへてなといふ類ハ皆はしのを成へし

をしなへて、をし明かた

舟を、す、をしはかる

大せいをしよする

此類忘てもおくのおにてあるへからす

一物のをとハ何もはしのをなり

をとつれ、鐘のをと、風のをと

をとと川、をとなし川、まりの香をと

此類音といふ字忘てもおくのお

217

にてあるへからす

一はせをは、はせうとハかゝす

はせをとかなにかくによりて古今の物の名の哥にはせをはとよめり

哥に

いさゝめに時待まにそ目ハへぬれ

心はせをは人に見へつゝ

作者きのめのとの此哥ハさゝ松、ひは

はせを、此四つをたち入てよミたる

哥なり

しをにの花とかけり

しをんとハかゝす

此故に哥に

ふりはへていさ古郷の花見んと

こしをにほひにうつろひにけり

一りうたんの花とかけり

りうたうとハかゝす

此故に哥に

我宿の花ふみちらすとりうたん

のはなければや爰にしもくる

作者友則

一けにこしとかけり

けんこしとハかゝす

237

此故哥に  
うちつけにこしとや花の色を見ん

をく白露のそむるはかりを

此哥作者やたへのと有をミなへ

しとハはしのをせ女即花とかけり

をんなとハはしのを成へしをミなへし

をたち入たる哥に

白露を玉にぬくとやさゝかにの

花にも葉にもいとをミなへし

をんなハはしのをせ

おとこハおくのおなり

をのこの時ハはしのをせ

此近道の口傳の外にかれこれかける

かなおほし假名に書候字又

わろきもあれハはしはいや おくのひや

中のあるやなと思ひの外にかけるも

あり中のえハ内えと行所を以てかける

故にせるしるより外に中のえをかける

字あるへからすはしへのハふひへに

かよハぬ外にはしへのをかける字おほ

ししろたへたへかねてなと妙の字と

堪の字とハふひへにかよハされとも

はしへのをかけるかへる鳥なとかけ

247

247

247

247

247

247

247

257

257

257

257

257

257

257

257

257

257

257

257

257



るふひへとハゆかさる字也されとも  
 歸ると云字かなに書時に中のえ  
 おくのゑ似合さる間はしのへを  
 かへるとかけり  
 此類他准之也

一をのれをのつからをのかさま  
 をのく是ハ忘てもおくのおにて  
 有ましき也

一おほしめしおハしましたとハおくの  
 お成へしおハしましたとハはしの  
 をかく人もありあやまりにやおハし  
 ますとハ御座あるとかくなり何も  
 御の字ハおくのお成へし

宗祇かなつかひちかみち終

宗祇假名つかひ口傳の奥祕

一上い 古系 ない うれしい

一下ぬ 井居 終 初

267

上二用  
 一を小 音織 花ををしゆる  
 上斗 乙折 奥

一ふひへ おもひは  
 おもひは へラエトヨム時  
 はしのへ

中のえを(取りあえず原文の字体のまま示す)  
 一江へえ 見ゆる 見ゆる  
 聞え 聞ゆる

一五声 笛 一字ノ時用  
 一ほヲヲトヨム時 顔塩販

247

一はーハ 初て 端 是ハ  
 上中下ニ用

(原文「と」同上)  
 一わいわ井ノ時斗中ニ用  
 一わ、其外ハ皆上斗ニ用

(原文「わ」)  
 一わ渡別 上斗

一う 僧法師  
 ウヲヲトヨムトキハ (ママ)

277 271

此一卷ハ宗祇假名つかひちかみちと云  
 極祕の口傳書なり池田玄察處士の  
 所傳也

287

287

297

297

307

(合点・項目点は、全て朱点のようである。)

鹿兒島大学教養部講師